

ルポルタージュは 世界を動かす

時代を解き明かすキーワードは
「民衆自身による自由と民主主義、
そして人間らしさの回復」……。

事実だけが何よりも

問題に迫るライター自身を

開眼させ変革してくれる。

そして問題の本質を描くルポ作品が、
多くの読者を動かし、

そして現実を変革しえるのである。

リードのルポルタージュは、いまもなお新鮮であり、
歴史の画期的な転換期の決定的状況を
生き生きと伝えている。

見せかけの「繁栄」と、

『自由社会』のぬるま湯に浸って、

目先のその日暮らしに流されていると、

激動する時代から孤立し、

とり残されてしまうことにもなるのではないか。

リードがルポルタージュで問いかけたように、

「同時代の出来事」に私たちがどう接近し、

どう正確に理解するか……

激動の九〇年代だからこそ、

「ルポルタージュのフロンティア」としての

リードから学ぶものが多いのではないだろうか。

ジョン・リードから現代へ

松浦総三・柴野徹夫・村山淳彦・内野信幸著

ルポルタージュ

大月書店

松浦総三（まつうら そうぞう）

1914年山梨県生まれ、中央大学中退、渋沢栄一伝記資料編纂所、改造社を経て、1955年からフリー、東京空襲を記録する会代表、全国革新懇代表世話人、編著書に『東京大空襲・戦災誌』（全5巻、講談社）、『占領下の言論弾圧』（現代ジャーナリズム出版会）、『天皇とマスコミ』（青木書店）、『戦後ジャーナリズム史論』（出版ニュース社）、『松浦総三の仕事』（全3巻、大月書店）、『逃げられなかった父と母』（編、大月書店）その他。

柴野徹夫（しばの てつお）

1937年京都市生まれ、新聞記者を経て、フリー・ジャーナリスト、著書に『原発のある風景』（未来社）、『日本の貧困』（新日本出版社）、『まんが・原発列島』（大月書店）、『京の花いちもんめ——ルポ・古都つぶしに立ち向かう市民』（機関紙共同出版）、『そこに原発がある』（あけび書房）その他。

村山淳彦（むらやま きよひこ）

1944年北海道生まれ、北海道大学文学部卒業、東京大学大学院修了、現在、一橋大学教授、著書に『セオドア・ドライサー論』（南雲堂）、『アメリカ文学読本』（共著、有斐閣）、『文学とアメリカⅡ』（共著、南雲堂）その他、訳書に『世界をゆるがした十日間』（共訳、新日本文庫）、ジョン・タイテル『ピート世代の人生と文学』（共訳、紀伊國屋書店）その他。

内野信幸（うちの のぶゆき）

1949年東京生まれ、中央大学文学部卒、中央大学大学院修了、鹿児島短期大学講師を経て、現在、日本福祉大学助教授、著書に『ジャック・ロンドン』（共著、三友社出版）その他、訳書に『インディラがやってきた!』（共訳、三友社出版）その他。

ルポルタージュは世界を動かす——ジョン・リードから現代へ

1990年4月5日第1刷発行

定価はカバーに表示してあります

著者	松浦 浦 総 三 村山 野 徹 夫 内 山 淳 彦
発行者	平 智 享

〒113 東京都文京区本郷2-11-9

発行所 株式会社 大月書店

印刷 太平印刷
製本 田中製本

電話(営業)813-4651(編集)814-2931 振替 東京3-16387

Printed in Japan

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製(コピー)することは法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合にはあらかじめ小社まで許諾を求めてください

ISBN4-272-33021-7 C0036

ルポルタージュは

ジョン・リードから現代へ

松浦総三・柴野徹夫・村山淳彦・内野信幸著

世界を動かす

大月書店

ルポルタージュの輝き

「一九八九年東ヨーロッパ革命」、中国天安門事件を受けて、一九九〇年代は、地球上の各地で、主権者——つまり民衆の意志が国家を動かすはじめた。胸をはずませ、手に汗しながら、ニュースを見るきょうこの頃である。

奇しくも、その転機となった一九八九年は、東京大学法学部の比較憲法学者・樋口陽一教授の表現を借りれば、一七八九年のフランス革命から二〇〇年、一八八九年の日本帝国憲法制定から一〇〇年目にあたる。

——それはまた、世界の人権と憲法を考察するうえで、歴史上の特筆すべき二つの流れでもある、という『自由と国家』岩波新書）。

歴史には、時代が大きく激動する熟成の時期というものがあるのだろうか。

東西のドイツを隔てていた「ベルリンの壁」が、ついに民衆の意志で取りのぞかれた。壁の構築から、二七年ぶりの快挙である。

東独・チェコをはじめ東欧各国の民主化も、さまざまな困難を踏み越えながら進んでいる。中国の民主化も、いったんは軍隊の弾圧に後退したとはいえ、いま静かにかつ着実に「時節の到来」を待っている。その大波動は、欧米では反核運動に示された。私たちの日常でも事情は同じである。チリの民主化、中南米の自立への熱気、南アフリカのアパルトヘイト体制を揺るがす民衆……。

いま、狭い地球を舞台に、今日の時代を解き明かすキーワードは「民衆自身による自由と民主主義、そし

て人間らしきの回復」ではないだろうか。

アメリカのジャーナリスト、ジョン・リードが、一九一七年のロシア十月革命の素顔と断面を、ルポルタージュ『世界をゆるがした十日間』で描いたのは、一九一九年のことである。以来、七〇年余の歳月が流れた。

しかし、リードのこのルポルタージュは、いまもなお新鮮であり、歴史の画期的な転換期の決定的状況を生き生きと伝えている。その後のソ連の紆余曲折がどうであれ、リードが描いた社会主義革命の歴史的意義とルポルタージュの真価は、色あせることはない。それどころか、ここへきて、いよいよその輝きを増しているというべきだろう。なぜなら、そこには、ロシア革命が本来めざしていた目標と志、初々しい歴史の変革者たちの姿が、ありのままに描かれているからである。

そこにこそ、時代の特徴とその本質、方向を描きだすルポルタージュの真骨頂がある。惜しくもリードは、一九二〇年、三三歳になる誕生日を前にして夭折した。それから七〇年が過ぎた。

興味ある現象だが、いま、アメリカでは、改めてリードの作品が若い世代に研究され、読まれつつある。またソ連でも、『世界をゆるがした十日間』が、いま、青年たちの間で競って読まれているという。そこには、社会主義革命の原点と当初の息吹が、粉飾抜きの実事として脈打っているからである。実は、スターリン時代のソ連では、この本は『禁書』とされていたのである。

一方、残念ながら日本では、リードはほとんど忘れられた存在になっている。これは驚くべきことであり、わが国の文学界、ルポルタージュの将来にとっても、憂うべきことである。

むしろ、激動の九〇年代だからこそ、『ルポルタージュのフロンティア』としてのリードから学ぶものが多いのではないだろうか。大きく揺れ動く時代のなかにあつて、今こそ私たちのなかに騒ぐ血を、前向きに、時代にツメを立てて生きる姿勢で、新たなルポの誕生に差し向けたい。

そんな思いから、本書は生まれた。

この本は、四人の共同作業である。

戦前・戦後をつうじて雑誌編集に携わり、ルポルタージュやジャーナリズムの研究に情熱を注いできたジャーナリストの松浦総三。アメリカ文学研究者であり、『世界をゆるがした十日間』（新日本文庫版）の邦訳者でもある村山淳彦（一橋大学）。同じくマイナリテイの視点を軸に、アメリカ文学の研究に取り組む内野信幸（日本福祉大学）。さらに、現役のルポライターであり、ジャーナリストの柴野徹夫。——以上四名の仕事である

ルポルタージュの考え方や文学のあり方など、当然のことながら、細部にわたってまで四名の意見は、全く同じというわけではない。しかし、ジョン・リードの業績への評価とルポルタージュへの関心の強さについては、共通している。いずれも、かつて『世界をゆるがした十日間』を、心を熱くして読んだ三代（松浦七〇歳代、柴野五〇歳代、村山・内野四〇歳代）でもある。何回も論議を交わし、それぞれの見解、個性を尊重し、生かしあいながら、ようやくでき上がったのが本書である。

改めてジョン・リードの作品と彼が生きた軌跡をたどっていくと、これまではっきり見えなかったリード像が、鮮明に浮かび上がってきた。彼の全人格と生きる姿勢、その息づかいまでが、ありありと見えてきたのである。それは実に魅力的な青春像であり、また時代に向きあうジャーナリストが失ってはならない視座と姿勢を再確認させてくれるのである。

リードを起点にしてルポルタージュを見ていけば、今日のジャーナリズムの問題点やルポルタージュ、そこに欠けている問題点なども見えてくるはずだとにらんだ当初の狙いは的中した。

本書の題名は『ルポルタージュは世界を動かす』。——それは、筆者四名の素直な実感であり、心からの願

いでもある。

本書の構成は、第I部で、リードの人間的な素顔と生き方、仕事と恋など、ルポライター、ジョン・リードの人間的な核心の部分に、可能なかぎりスポットをあてて、具体的に紹介したつもりである。ただし、「リード伝」を意図したものではない。あくまでも、リードをしてルポルタージュに生涯をかけたものの正体を見きわめ、そしてリードというすぐれたジャーナリストを生み出したアメリカの時代状況と、その背景に迫ってみたのである。執筆には、村山と内野、柴野があたり、それぞれ担当は末尾に記した。

第II部では、激動の二〇世紀とルポルタージュの意味を考えながら、その歩みを追ってみた。また、世界と日本のルポの特徴にも、可能なかぎり触れた。多分にそれは筆者の独断と偏見にみちたものであり、重要なライターや作品をたくさんもらしているだろうと思う。この点を、あらかじめ、お詫びしておく。執筆は、村山と内野の助言も得て松浦と柴野の共同であたった。

本書の執筆中、一度、東京・吉祥寺の石垣綾子さんのお宅を訪ねた。

彼女は、一九二六年に渡米し、夫君の石垣栄太郎画伯とともに二五年間、アメリカで進歩的な芸術創造・文芸活動にたずさわってこられた。

一九二九年には「ジョン・リード・クラブ」の結成にも参加した人である。このクラブは、当時アメリカの広範な芸術家の意識変革に大きな影響力を及ぼした。また、アグネス・スメドレーやエドガー・スノーとも親交のあった方である。そんな当時の（リード以後の）アメリカの模様も伺いたかったのである。

石垣さんは、はや八〇の坂を越えられた。彼女の著書には、『病めるアメリカ』『回想のスメドレー』をはじめ、パール・バックの訳書など多数があるが、今も執筆活動や、スメドレーの研究書の翻訳活動に励んで

おられる。さらに、故石垣栄太郎の美術館（氏の出身地である和歌山県太地町。九一年開設予定）の創設実現に意欲を注いでおられる。

「あたしがアメリカへ渡ったのは娘時代。一九二六年から戦後の五一年までアメリカで暮らしたわけね。

二〇年代のアメリカといえば、世界恐慌の前夜でしょ。すごい不況で、ストライキの波が全米を揺さぶっていたわ。しかも、一九一七年のロシア革命の影響を恐れて、資本家はヒステリックに戦々兢兢としてる。そして一九二七年夏、アメリカの暗黒面を剥出しにしたサッコ・ヴァンゼッティ事件の真っ最中だった。政府はストの弾圧と合わせて、すべての社会不安を『過激分子』のせいにして、『赤狩り』に狂奔していた。サッコとヴァンゼッティはその謀略のスケープ・ゴートね。イタリア移民で無神論者、戦争に反対で徴兵も忌避したの。ある殺人事件の凶悪犯人として、無実の二人は死刑に処せられた。これへの非難の声は、アメリカ中に高まったわよ。ヨーロッパや南米でも、抗議のストやデモが毎日続いたの。

続いてやってきた一九二九年一〇月二四日のことは忘れもしないわ。絶望的な大恐慌、『暗黒の木曜日』。栄太郎と私は、食うや食わずのどん底暮らしね。それ以上に、アメリカの庶民のほとんどが失業状態で餓死寸前だったんだから。それは恐ろしいパニックよ。

「ジョン・リード・クラブ」が結成されたのは、そのすぐあとね。はじめは『ニュー・マッセズ』誌の執筆陣の若い反逆者たちのささやかな集まりだったけど、すぐにこのクラブは全米に波及して、芸術家たちの革命的情熱の核になったわよ。体制の矛盾に目覚めていく芸術家たちの拠点になったわけです。三〇年代の精神的覇気に満ちたアメリカの文学や美術を花開かせた土壌、原動力になったんです。『アメリカの良心』と言ってもいいわね。リードの精神を引き継ぐと、記念してつけられた名前です。

世界的な恐慌の渦巻きが、悪霊みたいに襲いかかってくるとき、芸術家の役割はたんに世界を描くだけで

なく、世界を変革させることだ。そのためには、労働者と連帯し、階級闘争に参加する必要がある、という主張が支配的でした。芸術家は「民族のアンテナ」でなきゃならない。そのためには、働く民衆の息づかいをいきいきと表現しなければって、みんな、それはすごい情熱で燃えていたわ。栄太郎も「ニュー・マッセズ」の美術寄稿家グループの一人でしたけど、当時、ロマン・ローラン、アグネス・スメドレーなんかも寄稿していたんですよ。そこには、自由の伝統が生きていました。

一九三〇年代といえば、満州事変に始まる日本帝国主義が荒れ狂っていた頃よ。

けれど、太平洋戦争をはさんで、戦後のアメリカは大きく変質していきました。戦前の日本と瓜二つの侵略政策を次々とすすめていきました。その変貌の激流のなかで、思想弾圧のすさまじい形相が全米に広がるのを、私たち見ましたよ。見たばかりか、その圧力は、私たちにも襲いかかってきたんです。一九三〇年代のアメリカとその挫折からファシズムへの変質。朝鮮戦争の少し前、一九五〇年にアメリカを吹き荒れた反共・赤狩りの「マッカーシー旋風」と「マッカーラン法」。それは「現代の魔女狩り」とも呼ばれましたけど、まさにネオ・ファシズムですね。密告、監視、圧迫、狂気、集団ヒステリ……。

あの頃でしょう？ 日本でも「破壊活動防止法」ができ、「レッド・ページ」の嵐が吹き荒れ、ジャーナリズムや労働運動が右寄りになっていったのは。日本政府の動きは、完全にアメリカの弾圧政策に追随していますね。アメリカ政府は、共産党を非合法に追い込んでいったんです。その行きついた先がベトナム侵略だったんじゃないですか？ そして、いまだパナマへの侵略」

石垣さんは、終始目を輝かせ、張りのある声で語ってくれた。そして、急に明るい表情になり、こう言った。

「あたし今、アグネス・スメドレーについて書いた本の翻訳をしてるんですの。スメドレーとエドガー・スノーは、私たち親しくお付き合いした人です。どちらもマッカーシズムに葬られた作家です。でもね、彼ら

は八方塞がりの中にあっても、けっして自分自身を裏切らなかつた。そのことは、いまアメリカの若い人たちを、励ましているんですね。リードはもちろんですけど、スノーやスメドレーが若者たちに読まれはじめているんです。私のことみたいにうれしいですね。必ずや、若い人たちの中から「アメリカの良心」は、不死鳥みたいにまた甦ると思いますよ」

「歴史って単純じゃないし、永い年月がかかりますけど、民衆が自由と民主主義を求めてたかっているかぎり、前へ進むんじゃないかしら？　そこで忘れずに言いたいのは、日本の新聞も国民も、日米安保条約の存在は忘れてしまったのかしら？　みなさん「消費税反対」とはいうけれど、その根源には、ちっとも目を向けないんじゃないですか？　せっかく社会主義革命に踏みだした国々が、なんだか心許ないことをやっているとかが多いんですけど、民衆の批判精神が健在であれば、必ず立ち直るでしょう。それより、あたしは日本の明日のほうが、よほど心配なんですよね……」

石垣さんは、最後まで穏やかな笑みをたたえながら、話してくださった。

一九二六年（大正一五）、一三歳の石垣綾子さんは、自由を求めてアメリカに渡った。それはジョン・リードの死後六年目のことである。いらい二五年間、さまざまな迫害と辛苦を乗り越えて彼女は激動するアメリカの歴史を目撃したわけである。夭折したリードの死後も、彼の志は、多くのジャーナリストや作家、芸術家たちに受け継がれていく。それは何故なのか。また当時のアメリカの状況はいかなるものだったのか。そして、ジャーナリストとしてのリードは、それにどのように立ち向かい、食い込んでいったのか。その青春像は……。

さっそく、一九一〇年代のアメリカのまったなかへ、リードが生きている世界へ読者の皆さんをご案内することにしよう。

ルポルタージュの輝き

第Ⅰ部 ジョン・リードの光茫

11

1 バタソン・ストライキ・ページェント

12

2 レッドスキン・ジャック

23

3 ニューヨーク・リトル・ルネサンス

〔1〕

33

■ グリンゴ・リードの見たメキシコ革命

46

4 ニューヨーク・リトル・ルネサンス

〔2〕

56

■ ルイズとジャックが築いた愛

70

■ 揺れ動くツアーリのロシア

76

5 タワリシチ・ジャック

84

■ 蘇ったルイズとジャック——『レッズ』

93

第Ⅱ部 ルポルタージュの衝撃波

1 ルポルタージュのフロンティア

100

2 同時代の探求

110

■ ルポの基本と『十日間』

118

3 ルポルタージュの歩み〔1〕アメリカを中心に

132

4 ルポルタージュの歩み〔2〕日本

153

ルポルタージュは世界を動かす

191

第 I 部 ジョン・リードの光茫



執筆するジョン・リード

1 パタソン・ストライキ・ページェント

■労働者のページェント

一九一三年六月七日土曜日午後九時、ニューヨーク随一のイベント会場マジソン・スクエア・ガーデンが誇る一〇〇メートルの高塔の四面には、赤い電飾のIWWという巨大な三文字が輝き、「パタソン・ストライキ・ページェント」の開幕を告げていた。会場はすでに一万五〇〇〇人の観客で埋まり、そのうち一〇〇〇人は立ち見の超満員。しかもなお、戸外には入場を待つ人びとの長蛇の列ができていて、警察の命令によりガーデンの入口は閉じられ、結局大勢の人びとが入場できぬまま外にとり残された。予定では八時半に始まることになっていた。

このページェントは、パタソン・ストライキの実情と労働者の要求をニューヨーク市民に訴えるためのものである。この年二月以来、ニューヨーク近郊ニュージャージー州パタソンの絹織物労働者は低賃金や労働強化に抗議し、IWWに結集して三か月以上にわたるストライキをたたかっていた。そのほとんどは移民労働者である。彼らは警官やガードマンに殴られ、逮捕・投獄されながらも、たたかいをやめなかった。しかしその実態は、報道が規制されているために、ニューヨークの一般市民にはほとんど知られていなかった。

マジソン・スクエア・ガーデン 今日の高塔は八番街のペンシルベニア・ステーションに隣接した位置にあるが、これはその位置と建物を何回かにわたって変えてきたあげくに落ち着いた先であって、当時のガーデンは、その名のとおりマジソン・スクエアに隣接するマジソン街二六丁目にあった。

IWW 一九〇五年に創立された世界産業労働組合の略称。戦間的な労働運動の全米組織である。

パタソン パタソンは、合衆国独立後に工業立国を主張したアレグザンダー・ハミルトンが政策的に育成した、模範的な工業都市のひとつだった。有力な綿紡織業を擁していたが、後に絹紡織業に転じ、日本から輸入したマユを加工してニューヨークの市場に送り出すようになった。

だから何とかして知らせる必要があったのだ。

パタソンのストライキに同情してストに突入したニューヨーク市内の絹織物労働者を主体とする三〇〇〇人は、このページェントに無料で入場を認められていた。

ストライキ支援のイベント成功を恐れるニューヨーク市警は、会場周辺に警官を大挙配置していた。彼らはその頭上で輝く「IWW」の電飾に慌てて電源を切ろうとしたが、とっさにはスイッチが見つからず、齒ざしりするしかなかった。

ルネサンス様式の外観をもつマジソン・スクエア・ガーデンの内部は、左手に大円形劇場、右手にレストランがあり、その階上にはダンスホールとコンサート・ホール、さらにその上には喫茶室とルーフガーデンが配されている。それは、近代的な大都市になくはならぬ、市民のための一大娯楽空間になっていた。

この大劇場を一晚借りるのに支払った料金は一〇〇〇ドル。労働者や知識人から寄せられた数千ドルに達する公演資金カンパのなかからまかなわれた。パタソンの労働者がスト前に受け取っていた賃金が週給せいぜい一四ドル、たいていは一〇ドル余りだった時代のことである。

劇場地下の、ふだんはサーカスの象や猛獣を収容しておくための広大なスペースには、この日、パタソンからやってきた多数の女工をふくむ労働者約一二〇〇人が控え、開幕をいまや遅しと待ち構えていた。

そのなかには、IWWの著名なオルグ活動家カルロ・トレスカの指揮のもと、パタソンから三七キロの道のりをスト支援を訴えながら徒歩で行進してきた八〇〇人もいた。彼らは、パタソンから特別列車を仕立ててマンハッタンにのりこんできた一一〇〇人の仲間と

パタソンの労働者は一八二八年にストライキを打ったのをはじめとして活発な労働運動を展開し、一九世紀末以降は大量のイタリア人移民を迎え入れて、社会主義、無政府主義の拠点となった。

ルネサンス様式 ルネサンス様式は、ルネサンスやギリシャ・ローマの精神を讀める体裁をとりつつ、市民の反キリスト教的享楽主義や帝国主義の気分を表現している。それゆえ、先行する流行様式であるゴシック・リバイバルのキリスト教拝跪に反発しているし、後続のモダニズムとも対立する。これは建築様式についてだけでなく、当時のアメリカ文化全体についても言えることで、ルネサンスへの期待が、一方で中世趣味と、他方でモダニズムと競合しながら混在していた。カルロ・トレスカ 一九〇四年にアメリカに移民してきたイタリア人の社会主義者（一八七九—一九四三）。やがて無政府主義に転じ、暗殺されるまで種々の反ファシズム左翼運動で活躍した。一時期フリンと夫婦同様の仲にあった。

ユニオン・スクエアで合流し、会場までの街路を、楽隊の奏でる「マルセイエーズ」や「インターナショナル」に合わせて歌いながら、八時間労働などの要求を掲げてデモをしてきたのである。この行進自体がじつはパタソン・ストライキ・ページェントの序幕として構成されていたから、すでにページェントは始まっていた。

晴れ舞台での出番を待つて緊張している労働者たちは、指導者ビッグ・ビル・ヘイウッドが三週間前にストライキ闘争委員会の席上で上演計画を提案して以来、すきつ腹をかかえ、苦しいスケジュールをやり繰りしてリハーサルを重ねてきていた。

■演出家ジャック

リハーサルをメガホン片手に指導、監督し、このページェントの制作者兼演出家をつとめたのは、ジャックと呼ばれる二五歳の大柄の男、すなわちわれらがジョン・リードである。ページェントの脚本を書いたのもジャックである。

ジャックは、記者としてこのストライキの現地取材に取り組み、取材中、警官隊になぐられ、逮捕され、あぐくに二〇日間の禁固刑に処せられた。しかし、刑務所内でも彼は、ジャーナリストとしての取材を忘れていない。監房の中には、ストの指導者や参加者をはじめ、さまざまな人びとが拘禁されていた。ジャックの逮捕に保釈金を積もうとするものもいたが、獄中のジャックは首を横に振った。

ジャックは、意外にも四日目に保釈される。じつは経営者も警察も刑務所も、ジャックにうんざりしていたのである。というのは、ジャックの投獄に抗議する記事が多く新聞に出始め、否応なしにストは全米に大々的に報道される羽目になったからだ。



パタソン・ストライキ。マジソン・スクエアに向かって行進する労働者たち
("We Shall Be All"より)

ページェントのシナリオは、だから、彼ひとりの想像で作りあげたものではない。彼自身の体験をふまえていることは言うまでもない。それだけでなく、スト中の経験を労働者やその家族たちに語ってもらい、市民にぜひ見てもらいたい場面、聞いてほしい要求を提案してもらって、それをジャックがまとめたのだ。執筆にあたって丁寧に取材し、スト参加者自身の自発性を最大限に尊重しようとしたジャックの姿勢が、見てとれる。後年、『世界をゆるがした十日間』を書いた彼の、人びとと現実に対する姿勢が、そこにすでに芽吹いていた。

それにしても、準備期間はわずか三週間。それも、十分な資金もなく、演劇にはずぶの素人たちで、この前代未聞の実験を成功させることができるだろうか。ストライキをたたかっているさなかの人たちに、警官やスト破りの暴力団の役を演じてもらうように説得できるだろうか。

この間、何度も、この上演計画は無理だとする声が闘争委員たちの中に生じたけれども、そのたびに労働者たちはあくまでも実行を主張して、一部の幹部や協力している知識人たちにあつたためらいを押し切った。ジャックはリハーサルに、また会場設営や宣伝組織に、ほとんど不眠不休で駆けまわり、パタソンとニューヨークのあいだを毎日のように往復した。

その当日もジャックは朝九時に、パタソンの隣町、ストライキに同情的な社会主義者の市長を擁するヘイルドンでリハーサルを監督してから、出演する労働者たちとともに特別列車でニューヨークに入り、午後にはマジソン・スクエア・ガーデンで仕上げの舞台稽古をやった。しかし、準備不足はまだ否めず、おまけにストで食事もうくにとっていなかった

ユニオン・スクエア ニューヨーク市内における左翼の集合地点。昔から労働者向けの商店、娯楽施設に囲まれ、労働者の集会場としてよく使われた。スクエアのまわりには、労組本部や左翼ジャーナリズム編集室などが位置していた。
ビッグ・ビル・ヘイウッド 本名ウィリアム・D・ヘイウッド（一八六九—一九二八）。ユタ州の生まれで、若いときから坑夫として働き、西部の鉱山労組の指導者になる。IWW創立に参加し、弁舌のたくみさ、大衆的な人気のおかげでその象徴的存在とみなされた。

ビル・ヘイウッド

